

〈共同討議 I 概要報告〉

カントとケーニヒスベルク大学

福谷 茂

哲学史研究の精度あるいは解像度はぐんぐん向上しつつある。21世紀の世界に生きてヨーロッパを見つめる私たちの視座そのものが改訂を迫られていることを背景として、史料・資料へのアクセスの改善、有能な若手研究者たちの出現による研究現場の活性化は随所で長年受け入れられてきた哲学史記述の書き換えを要求している。カント研究もまた例外ではない。新カント主義、ハイデガー、分析哲学などの特定の哲学上の立場を離れて、わたしたちは歴史研究者の一面をも持ってピースミールな事実の発掘と確定に裸眼で勤しむことが必要になっていること、これが内外で目立った研究の現況である。

今回共同討議のテーマとして「カントとケーニヒスベルク大学」が立てられたことは日本カント協会の歴史にとっても画期的なことだと思う。なぜならばそれは既成のカント哲学形成史が解体され、新しい視線と新しい情報がこの問題に関して共有される必要を学会全体が感じていることを意味するからである。

この点で提題者のお二人が共に「アリストテレス主義」を標題に出していることが象徴的である。中世における大学アカデミズムの成立とアリストテレスの復興とはそもそも不可分のことだった。ところが、カントが近世哲学の代表とされてしまったため、中世のシンボルとしてのアリストテレスはカントにとっても批判の対象であったという面ばかりが定着してしまった。

しかし菅沢龍文論文は諸学派の垣塙ともいべきケーニヒスベルク大学を舞台としたカント哲学の成立においてアリストテレス主義が重要な役割を果たしたことを論証し、佐藤恒徳論文は宗教改革以来の哲学史というマクロ文脈とケーニヒスベルク大学の状況というというミクロ文脈とを巧みにつないでケーニヒスベルク大学におけるアリストテレス主義の厳存とその態様を実証的に明らかにしている。

両論文とも、アヴェロエス、ラムス、ザバレラ、スアレス、カロフといった従来カントを理解するために参照の必要があるとは考えられていなかった人名をふんだんに援用して、新しい魅力的な研究テーマの可能性を私たちに垣間見させてくれている。これはイタリアのピエロ・ディ・ヴォーナが「忘れられた存在論 *ontologia dimenticata*」という概念の提唱によって訴えている、16世紀以後の第2スコラ哲学がアカデミズムにおいて果たした役割の再認識ということにもつながってゆくことだろう。

大会会場においては会員から締めくくりのように「カント哲学の形成にはあの場所が必須であったとお考えですか」という鋭い問いが提出された。提題者のお答えはおそらくは「然り」という趣旨だったと司会者は了解している。こうして「カントとケーニヒスベルク大学」というテーマはカントを形成したマクロ文脈とミクロ文脈とはなんだったのか、という再定義の探求において近世哲学史の書き換えという壮大な課題へと私たちカント研究者を導いてゆくのである。